

## 第3章 考察

### I こども×地域・地域活動×公民館 ―実態と論点―

越村 康英（弘前大学）

#### はじめに

本調査は、県内の小学校5年生・中学校2年生・高等学校2年生の約24,000人を対象に実施された全数調査である。各学校の協力もあり、回収数〔回収率〕は、小学校5年生で6,445人〔80.5%〕、中学校2年生で6,125人〔68.0%〕、高等学校2年生で4,939人〔70.5%〕と、多くの児童・生徒から回答をいただいた。

この調査結果は、こどもたちの「地域に対する意識」や「地域活動の現状」等を把握する上で重要な手がかりとなる。青森県教育委員会や青森県生涯学習審議会はもとより、県内の市町村教育委員会・学校・社会教育施設・学校運営協議会・PTA等においても調査結果に着目し、「ふるさと青森を愛し、誇りに思う人づくり」に向けた施策や取り組みについての議論が広がっていくことを期待したい。以下、その素材となることを願いつつ、本調査から見えてきたことを私なりに整理してみたい。

#### 1. 地域に対する意識

##### (1) 定住意識【問6 (p.6)】

「今、住んでいる地域に（身近な地域）にずっといたいと思いますか」という質問では、「思う」28.9%、「やや思う」38.5%と、全体の67.4%が肯定的に回答している。小学校5年生では、肯定的な回答割合が高く、「思う」51.0%、「やや思う」34.5%である。一方、中学校2年生では、「思う」18.1%、「やや思う」44.1%、高等学校2年生では、「思う」13.5%。「やや思う」36.8%という結果になっている。このように、学年が上がるほど「思う」の割合が大きく下がっており、地域に「ずっといたい」という意識が低下する傾向が見られる。

##### (2) 地域への愛着【問7 (p.6)】

「今、住んでいる地域（身近な地域）が好きですか」という質問に対し、全体では「好き」47.6%、「やや好き」38.6%という結果であり、両者を合わせると、86.2%のこどもが地域に対する好意的な意識をもっている<sup>(1)</sup>。

ただし、定住意識と同様に、学年により結果は大きく異なる。小学校5年生では、過半数（63.1%）が「好き」と回答しているものの、中学校2年生では、「好き」40.7%、「やや好き」43.0%という結果であり、「好き」の割合が20ポイント以上も減少し、「やや好き」の比率が最も高くなっている。高等学校2年生ではより顕著で、「好き」35.8%、「やや好き」44.6%という状況である。このように、学年が上がるにつれて、地域への愛着度も低下する傾向が見られる。

こうした結果となっている背景には、発達段階による影響が考えられる。思春期は、自立への欲求が高まり、自己の世界を広げながらアイデンティティを形成していく時期である。そのため、「身近な地域」から「より広い社会」へ強く意識が向けられ、地域への愛着が相対的に低くなる（弱まったように見える）のではないか。他方、SNSを含めたメディアの影

響もあり、都会的な華やかさを「よきもの」とする画一的な価値観が形成され、「地元には何もない」というような否定的意識をもたされ易くなっていることも一因と思われる。他にも、進学・就職で地元を離れなければならない現実を前向きに受け止めるために、地域への愛着を意識的・無意識的に薄めているケースも含まれているのではないか。

### (3) 「地域への愛着」と「定住意識」【問7×問6 (p.7)】<sup>(2)</sup>

小学校5年生では、地域を「好き」と回答した4,070人のうち、地域に「ずっといたい」と「思う」71.7%、「やや思う」23.8%と、9割を上回る児童が地域への定住意識をもっている。中学校2年生では、地域を「好き」と答えた2,493人のうち、地域に「ずっといたい」と「思う」37.7%、「やや思う」47.1%となり、一定の割合は保たれているものの、小学校5年生に比べ「思う」の比率が半減している。高等学校2年生では、地域を「好き」と答えた1,769人のうち、地域に「ずっといたい」と「思う」31.3%、「やや思う」42.7%と、地域に「ずっといたい」という意識がさらに弱まる傾向が見られる。

以上から、地域に対する好意的な意識は、いずれの学年でも「ずっといたい」という意識と結びついてはいるものの、学年が上がるにつれ肯定的な割合は低下しており、進学・就職などとも関わって、地域外への視野の広がり定住意識にも影響していると考えられる。

### (4) 地域への興味・関心【問9 (p.9)】

小学校5年生では、地域の出来事への興味・関心が「ある」33.8%、「ややある」38.5%と、約7割が興味・関心を持っている。中学校2年生では、「ある」14.5%、「ややある」35.9%と、小学生に比べて「ある」の割合が大きく低下する。高等学校2年生では、「ある」12.8%、「ややある」34.2%と、中学生と同程度の比率ではあるが、地域への興味・関心もやや低くなる傾向が見られる。このように、学年が上がるにつれて、地域の出来事への興味・関心は低下するが、一定の割合が「ややある」と答えており、関心が途切れているわけではないとも考えられる。一方で、中学校2年生・高等学校2年生では、約半数が興味・関心は「あまりない」「まったくない」と回答していることにも注目し、理由を探る必要がある。

### (5) 地域の大人との関わり【問10 (p.9)】

「地域の大人に、放課後や休日など勉強やスポーツ、体験活動に関わってもらったり、一緒に遊んでもらったりすることはありますか」という質問<sup>(3)</sup>に対し、小学校5年生では「ある」29.3%、「ややある」18.3%と、約半数が地域の大人との関わりを経験している。しかし、中学校2年生では「ある」15.4%、「ややある」13.2%、高等学校2年生では「ある」8.2%、「ややある」10.1%と、学年が上がるにつれて地域の大人との接点は大きく減少する傾向がみられる。

このことから、成長に伴い学校生活の比重が増したり、地域活動に参加する機会が減ったりすることで、中学生・高校生ほど地域の大人との接点が希薄になりやすいと考えられる。また、関わりの減少は地域への興味・関心の低下にもつながる可能性もあり、学年に応じた関わりの創出が課題といえる。

### (6) 「地域の大人との関わり」と「定住意識」【問10×問6 (p.10)】<sup>(4)</sup>

小学校5年生では、地域の大人との関わりが「ある」と回答した1,889人のうち、60.3%が地域に「ずっといたい」と感じている。一方、関わりが「まったくない」と回答した1,381

人では、44.5%にとどまり、約 16 ポイントの差がある。

中学校 2 年生でも同様の傾向があり、関わりが「ある」945 人では、28.1%が「ずっといたい」と回答したのに対し、「まったくくない」2,351 人では 14.4%と、約 14 ポイントの差がある。高等学校 2 年生では、関わりが「ある」405 人のうち 29.1%が「ずっといたい」と答えたのに対し、関わりが「まったくくない」2,481 人では 10.5%と、約 19 ポイントの差がある。

このように、地域の大人との関わりは、「地域にずっといたい」という定住意識とも一定の関連があると言えるのではないか。

#### (7) 「地域の大人との関わり」と「地域への愛着」【問 10×問 7 (p. 11)】<sup>(5)</sup>

小学校 5 年生では、地域の大人との関わりが「ある」と回答した 1,889 人のうち、73.0%が地域を「好き」と感じているのに対し、関わりが「まったくくない」1,381 人では 53.7%であり、約 19 ポイントの差がみられる。

中学校 2 年生では、関わりが「ある」945 人の 55.9%が地域を「好き」と回答し、「まったくくない」2,351 人の 32.5%と比べて 約 23 ポイント高い。高等学校 2 年生でも同様に、関わりが「ある」405 人では、57.3%が地域を「好き」と答え、「まったくくない」2,481 人の 29.3%より 28 ポイント高い結果となった。

このように、いずれの学年でも、地域の大人との関わりが「ある」こどもの方が地域を「好き」と感じている割合は高く、特に中学生・高校生ではその差がさらに広がる傾向がみられる。地域の大人との接点が、地域への愛着の形成にも影響していることがうかがえる。

## 2. 地域活動の現状

### (1) 地域・社会への貢献意識【問 13 (p. 13)】

「地域や社会を良くするために何かしてみたいと思いますか」という質問<sup>(6)</sup>に対し、小学校 5 年生では「思う」32.4%、「やや思う」45.9%と、約 8 割が前向きに捉えている。中学校 2 年生では「思う」18.5%、「やや思う」45.4%、高等学校 2 年生では「思う」16.0%、「やや思う」43.3%となり、学年が上がるほど「思う」の割合が減少する一方、「やや思う」については一定の割合が保たれている。こどもたちは学年が上がるにつれて進学・就職など将来への関心が強まり、地域への直接的な貢献意識は弱まるのかも知れないが、「何かしてみたい」という潜在的意識は中学生・高校生でも依然として半数以上に存在していると考えられる。

### (2) 「定住意識」と「地域・社会への貢献意識」【問 6×問 13 (p. 14)】<sup>(7)</sup>

小学校 5 年生では、地域にずっといたいと「思う」3,289 人のうち、43.4%が地域や社会を良くするために「何かしたい」と回答しており、「まったく思わない」134 人の 23.1%と比べると、約 20 ポイント高い。

中学校 2 年生でも同様の傾向がみられ、ずっといたいと「思う」1,106 人では、34.8%が「何かしたい」と答えているのに対し、「まったく思わない」387 人では 14.0%であり、約 20 ポイントの差が生じている。高等学校 2 年生では、ずっといたいと「思う」669 人の 35.4%が地域や社会を良くしたいと回答し、「まったく思わない」494 人の 10.1%と比べると、その差は約 25 ポイントとなっている。

このように、どの学年でも地域にずっといたいと考える子どもの方が、地域や社会のために行動したいという意識を強く持っており、その差は20～25ポイントと大きい。特に高校生では差が広がっており、地域への定住意識が貢献意識の重要な背景となっていると思われる。

### (3) 「地域への愛着」と「地域・社会への貢献意識」【問7×問13 (p.15)】<sup>(8)</sup>

小学校5年生では、地域を「好き」と回答した4,070人のうち、41.8%が地域・社会を良くするために「何かしたい」と答えているのに対し、地域が「きれい」と回答した57人は19.3%にとどまり、約23ポイントの差がみられる。

中学校2年生では、地域を「好き」と感じている2,493人の29.4%が「何かしたい」と回答し、「きれい」と答えた125人の9.6%と比べて約20ポイントの差が生じている。高等学校2年生でも同様に、地域を「好き」と答えた1,769人の28.0%が「何かしたい」と回答し、「きれい」と答えた112人の5.4%との差は約23ポイントとなっている。

このように、どの学年においても地域を「好き」と感じる子どもの方が、地域や社会を良くするために行動したいという意識が20ポイント以上高く、地域への愛着が貢献意識を強く支える要因となっていると思われる。

### (4) 「地域の大人との関わり」と「地域・社会への貢献意識」【問10×問13 (p.16)】<sup>(9)</sup>

小学校5年生では、地域の大人との関わりが「ある」と回答した1,889人のうち49.1%が地域・社会を良くするために何かしたいと「思う」と答えている。一方、関わりが「まったくない」と回答した1,381人では21.9%にとどまり、その差は約27ポイントである。

中学校2年生でも同様の傾向がみられ、関わりが「ある」945人の34.5%が「何かしたい」と回答したのに対し、関わりが「まったくない」2,351人では13.6%で、約20ポイントの差が生じている。高等学校2年生では、関わりが「ある」405人の40.2%が地域・社会を良くしたいと回答し、「まったくない」2,481人の10.6%との差は約30ポイントと3つの学年で最も大きい。

このように、地域の大人との関わりがあることの方が、地域・社会に貢献したいという意識は20～30ポイント高く、特に高校生ではその差が大きい。地域の大人との関わりが、貢献意識の形成にも影響を与えていることがうかがえる。

### (5) 地域活動への参加意欲【問14 (p.17)】

小学校5年生では、地域活動への参加について「積極的に参加したい」が16.5%、「できれば参加したい(興味はある)」が58.7%と、約4分の3が前向きな意欲を示している。

中学校2年生では、「積極的に参加したい」は9.1%に低下する一方、「できれば参加したい(興味はある)」は50.1%と約半数である。高等学校2年生では、「積極的に参加したい」は8.9%、「できれば参加したい(興味はある)」は49.8%と、中学校2年生とほぼ同程度である。

学年が上がるにつれて、地域活動に「参加したい」という積極的な意欲は低下するものの、「できれば参加したい(興味はある)」という層は中学生・高校生でも約5割を占めており、地域活動への潜在的な関心は比較的高いと思われる。地域との接点や具体的な参加の機会が整えば、興味が実際の参加行動へとつながっていく可能性も高いと考えられる。

#### (6) 学校外での地域活動への参加経験・参加頻度【問 15 (p.19)、問 16 (p.26)】

「学校の授業・行事以外で参加したことがある地域活動」について尋ねたところ、いずれの学年でも最も多かったのは「地域のお祭り」であり、小学校 5 年生 66.4%、中学校 2 年生 64.4%、高等学校 2 年生 60.3%と、多くの子どもが参加経験を持っている。次いで、「地域のイベント（花火大会、音楽やグルメフェスなど）」（小 42.7%、中 43.1%、高 37.6%）、「ボランティア活動」（小 24.8%、中 30.1%、高 36.9%）が続く。特にボランティア活動は、学年が上がるにつれて参加率が高まる傾向が見られ、高校生では約 3 人に 1 人が参加経験を有している。

一方、「子ども会活動（町内会活動）」への参加率は、小学校 5 年生 16.9%、中学校 2 年生 16.3%、高等学校 2 年生 19.4%といずれも 2 割を下回っている。少子化の進行や活動の担い手不足などにより、県内でも子ども会の解散が進んでいることが、参加率にも反映していると考えられる。また、「地域の歴史や文化を学ぶ活動」や「地域の人との交流会」への参加経験は、いずれの学年でも 1 割未満と極めて低い。こうした活動には、地域への理解や愛着を育む効果も期待されるが、現状では参加の機会が十分に提供されていない可能性も考えられる。

地域活動への参加頻度については、小学校 5 年生で「週に 1 回くらい」2.9%、「月に 1 回くらい」13.7%であったのに対し、中学校 2 年生では「週に 1 回くらい」0.8%、「月に 1 回くらい」5.7%、高等学校 2 年生では「週に 1 回くらい」0.9%、「月に 1 回くらい」4.3%と、学年が上がるほど定期的に参加している子どもの割合は減少する。また、いずれの学年でも日常的に地域活動に参加している子どもは極めて限定的であると思われる。参加頻度としては「半年に 1 回くらい」や「1 年に 1 回くらい」が主流で、高校生では約 4 割が「ここ 1 年間は参加していない」と回答している。

以上のように、地域活動への参加頻度は学年が上がるにつれて低下しており、やはり、学校生活や部活動・アルバイト・進学や就職の準備などで生活が忙しくなることが影響していると考えられる。こうした状況のなかで、気軽に（手軽に）参加できる地域活動の仕組みづくりも必要になるだろう。また、子どもたちが地域活動の情報を受け取りやすくするための広報の工夫や、地域活動の中にこどもの役割（出番）を意識的に用意することなど、参加へのキッカケづくりも期待される。

#### (7) 地域活動に「参加した理由」「参加しない理由」【問 17 (p.26)、問 19 (p.28)】

地域活動に参加したことがある児童・生徒にその理由を尋ねたところ、学年によって傾向の違いがみられた。小学校 5 年生では、「おもしろそうだったから」が最も高く 53.3%、次いで「家族にすすめられたから」35.6%、「友人が参加しているから」34.9%の順であり、活動の楽しさと家族からの働きかけが主な動機となっている。中学校 2 年生では、最も高いのが「友人が参加しているから」42.3%、次いで「おもしろそうだったから」42.0%、「家族にすすめられたから」28.6%と続き、友人の影響の強さがうかがえる。高等学校 2 年生でも順位は同様で、「友人が参加しているから」40.5%、「おもしろそうだったから」36.2%、「家族にすすめられたから」21.4%となっており、学年が上がるほど家族の影響は相対的に弱まり、友人の影響や活動の魅力が中心的な動機となっている。以上の結果から、子どもにとって魅力的な活動を模索していくことはもちろんのこと、小学生に向けては、家

庭への情報提供や保護者と一緒に参加できるようにするなどの工夫が有効と思われる。また、中学生・高校生には、学校に向けた情報提供の他、友人と一緒に参加しやすい活動にするなどの工夫<sup>(10)</sup>も必要になるのではない。

一方、問15で、地域活動に「まったく参加したことがない」と回答した児童・生徒にその理由を尋ねたところ、こちらでも学年による傾向の違いがみられた。小学校5年生では、「家で過ごしたい」が最も高く46.8%、次いで「興味がない」34.8%、「忙しい（習い事、勉強などで時間がない）」34.6%の順となった。中学校2年生では、「興味がない」が最も高く47.9%、続いて「家で過ごしたい」45.0%、「忙しい」32.8%の順となった。高等学校2年生では、「興味がない」が45.1%と最も高く、次いで「忙しい」34.3%、「家で過ごしたい」32.6%の順であり、学年が上がるにつれて「忙しさ」を理由に挙げる割合が増している。また、いずれの学年においても、これらに続いて回答割合が高いのは「どんな活動があるのか知らない」という理由であり、子どもたちに活動の内容・魅力・参加方法等がわかりやすく伝わる仕組みの必要性も示唆される。また、「障がいなどへの理解・配慮がない」を理由に挙げた割合は低い（小0.7%、中0.9%、高1.1%）ものの、誰もが安心して参加できる環境づくりは重要な課題であり、あらためて地域活動の在り方を再確認してみることも必要と言えよう。

#### **(8) 地域活動への参加から得られたもの【問18 (p.27)】**

問15で、何らかの地域活動への参加経験がある児童・生徒に「そうした地域の活動に参加してよかったことは何ですか」と尋ねたところ、いずれの学年でも「楽しかった（思い出ができた）」が最も高く、小学校5年生73.6%、中学校2年生71.1%、高等学校2年生64.7%であった。「楽しかった（思い出ができた）」ということは、地域活動への参加の基盤となる重要な価値を示すものであり、こうした肯定的な体験が地域活動の参加・継続を促すことにもつながる。

次いで、「同じ学年の人と過ごす（交流する）ことができた」（小49.8%、中45.1%、高34.3%）、「違う学年の人と過ごす（交流する）ことができた」（小36.0%、中33.1%、高25.8%）、「違う学校・地域の友だちができた」（小28.3%、中23.2%、高16.5%）が続き、学年・学校・地域を越えたつながりや仲間づくりが挙げられた。さらに、「親や教師以外の地域の大人と出会ったり、知り合いになったりすることができた」（小19.9%、中17.1%、高16.5%）という回答も一定数見られる。地域活動が同世代のネットワーク形成だけでなく、異年齢や異なるコミュニティとのつながりづくりにも寄与していることがうかがえる。

また、「地域のことに興味が高まった（関心がわいてきた）」（小25.6%、中14.6%、高13.6%）、「地域への愛着がわいてきた」（小23.2%、中16.6%、高14.5%）、「自分の出番（役割）や居場所を見つけることができた」（小13.6%、中8.4%、高7.0%）などについては、突出して高い回答割合は示していないものの、地域活動への参加が（その活動内容にもよるが）、地域への興味・関心を引き出すこと、地域への愛着の形成すること、地域における役割や居場所を見出すことにもつながることが示唆される。

#### **(9) 参加してみたい地域活動【問20 (p.29)】**

「これから参加してみたい地域の活動はありますか」と質問したところ、いずれの学年でも「地域のお祭り」が最も高く、小学校5年生51.8%、中学校2年生49.9%、高等学校2

年生 38.2%であった。

小学校 5 年生では、次いで「地域のイベント(花火大会、音楽やグルメフェスなど)」39.1%、「学校以外での自然体験活動(キャンプや農業体験など)」27.3%、「ボランティア活動(地域のゴミ拾い、除雪など)」27.1%が続いている。中学校 2 年生では、「地域のイベント」37.3%、「特にない」26.9%、「地域のスポーツ大会」20.5%の順である。高等学校 2 年生では、次いで「特にない」31.4%、「地域のイベント」29.2%、「ボランティア活動」20.0%となっている。

また、「地域の歴史・文化などを学ぶ活動」(小 15.1%、中 6.4%、高 6.3%)や「地域の人との交流会」(小 13.6%、中 6.6%、高 4.9%)については、小学生で一定の回答割合を示すものの、中学生・高校生では低い傾向が見られる。

このように、「参加してみたい」という意向の核となっているのは「お祭り」や「イベント」など、比較的、参加ハードルが低く楽しさがダイレクトに伝わってくる活動であることがうかがえる。また、学年が上がるほど「特にない」の回答割合が増えている。さらに、地域の歴史・文化に関する学習や交流会などの活動は小学生で一定のニーズがあるものの、中学生・高校生からのニーズは限定的であり、こうした活動を広げるには、学校の教育課程との接続など様々な工夫も必要となるだろう。一方、ボランティア活動については中学生・高校生にも一定のニーズが見られる。

以上の結果から、まずは「祭り・イベント」への参加を契機とし、そこから地域の歴史・文化に関する学習やボランティア活動(地域に貢献する活動)へ自然な形で発展していけるように、様々な地域活動を関連づけ構造的に捉え返していく視点も必要となってくるのではないかと。

### 3. 公民館等の社会教育施設への意識、利用状況、ニーズ

#### (1) 身近に感じている「地域の公共施設」【問 27 (p. 35)】

「あなたにとって身近な『地域の公共施設』はありますか」と質問したところ、小学校 5 年生では、「公民館(市民センター・コミュニティセンター)」が最も高く 40.9%、次いで「図書館(学校の図書室ではありません)」37.3%、「スポーツ施設(地域の体育館や競技場など)」34.6%、「児童館」30.2%、「博物館(美術館や科学館も含みます)」14.9%という結果であった。中学校 2 年生では、「図書館」45.1%が最も高く、次いで「スポーツ施設」43.9%、「公民館」41.6%、「児童館」18.7%、「博物館」12.8%が続いた。高等学校 2 年生でも、「図書館」52.9%が最も高く、次いで「スポーツ施設」41.6%、「公民館」39.3%、「児童館」18.8%、「博物館」12.4%という結果であった。

このように、いずれの学年でも図書館・スポーツ施設・公民館の三つが「身近な公共施設」として一定の割合を占めている点が特徴である。特に公民館については、小学生だけでなく中学生・高校生でも高い割合が示されており、地域の集会や学習・文化活動など多様な目的で利用される場所として、こどもにとっても身近な存在になっていると考えられる。

#### (2) 公民館の利用経験【問 28 (p. 36)】

「この 1 年間で公民館(市民センター・コミュニティセンター)を利用したことはありますか」という質問に対し、小学校 5 年生では利用したことが「ある」47.1%、「ない」31.6%、

中学校 2 年生では「ある」41.6%、「ない」44.0%、高等学校 2 年生では「ある」31.5%、「ない」58.0%という結果であった。学年が上がるほど「ある」の割合は低下し、とくに高校生では「ない」が過半数を占める。一方、小学生では約半数がこの 1 年間に利用した経験をもっており、比較的よく活用されているとも言える。

なお、他の都道府県の利用状況に関するデータは持ち合わせていないが、(1) に示したように、公民館を身近に感じている子どもが多いという結果もふまえると、公民館を利用する子どもの割合は高い水準にあるように思われる。本県において公民館は、多くの子どもにとっても身近で利用しやすい施設として根付いている可能性が高い。

### (3) 公民館の利用目的【問 29 (p. 43)】

公民館を利用したことが「ある」と回答した児童・生徒に「公民館を利用した目的は何ですか」と尋ねたところ、小学校 5 年生では、「公民館まつり・文化祭などの行事に参加するため」37.6%が最も高く、次いで「友だちとおしゃべりしたり、遊んだりするため」34.7%、「部活動の会場として利用しているため」21.4%、「トイレを利用したり、雨やどりをしたり、暑さをしのいだりするため」17.2%、「講座・教室に参加するため」15.7%という結果であった。

中学校 2 年生では、「友だちとおしゃべりしたり、遊んだりするため」36.0%が最も高く、次いで「部活動の会場として利用しているため」26.3%、「公民館まつり・文化祭などの行事に参加するため」26.1%、「自習スペースで学習するため」24.4%、「トイレを利用したり、雨やどりをしたり、暑さをしのいだりするため」16.9%、「講座・教室に参加するため」13.8%であった。

高等学校 2 年生では、「自習スペースで学習するため」38.6%が最も高く、次いで「友だちとおしゃべりしたり、遊んだりするため」26.2%、「公民館まつり・文化祭などの行事に参加するため」20.3%、「部活動の会場として利用しているため」20.1%、「講座・教室に参加するため」15.1%という結果であった。

以上に示したように、「友だちとおしゃべりしたり、遊んだりするため」がいずれの学年でも高いことは、公民館が子どもにとっても地域の「茶の間」<sup>(11)</sup> (= こどもの居場所・サークルプレイス) としての機能を果たしていると言える。また、「講座・教室に参加するため」は順位としては上位ではないものの、いずれの学年でも 10%以上を占めている点にも注目したい。さらに、「公民館まつり・文化祭」は各学年で一定の割合を占め、子どもと公民館をつなぐ貴重な機会にもなっていることがうかがえる。

学年ごとの傾向としては、小学校 5 年生では「行事への参加」が最も高い。中学校 2 年生では「友人との交流」や「部活動の会場」としての利用が目立ち、高等学校 2 年生になると、「自習スペースで学習するため」が高まっており、年齢に応じて公民館の利用目的も変化している。このように公民館は、子どもの年齢に応じた様々な役割を担いながら「地域の拠点」として機能していると言える。

### (4) 公民館を利用していない理由【問 31 (p. 45)】

公民館を利用していない理由を尋ねたところ、小学校 5 年生では「何をやっているのか知らないから」43.7%が最も高く、次いで「目的がないと入りづらいから」34.0%、「行く時間がないから」30.1%となった。中学校 2 年生でも順位は同じで、「何をやっているのか知

らないから」49.5%、「目的がないと入りづらいから」40.6%、「行く時間がないから」30.4%であった。高等学校2年生では、「目的がないと入りづらいから」40.9%が最も高く、次いで「何をやっているのか知らないから」39.2%、「行く時間がないから」29.6%となり、中学生・高校生では「心理的な入りづらさ」がより前面に現れている。

このように、「何をやっているのか知らないから」と答えるこどもが多いことに加え、「公民館を知らないから」（小17.6%、中11.8%、高7.2%）や「子どもや若者が利用する場所だというイメージがないから」（小11.6%、中12.6%、高7.3%）といった回答も一定数みられる。これらをふまえると、公民館の存在そのものや利用イメージの浸透が十分図られていないとも言える。

また、(3)で触れたように「友だちとおしゃべりしたり、遊んだりするため」に気軽に利用しているこどもがいる一方、「目的がないと入りづらい」と感じるこどもも少なくない。【問33 (p.47)】では、公民館が「もっと利用したくなる建物」になるための工夫についても尋ねているが、いずれの学年でも「気軽に立ち寄れる雰囲気づくり」（小64.0%、中68.9%、高60.2%）が最も高かった。明確な利用目的がなくともフラッと気軽に立ち寄れるような環境・雰囲気づくりを進めることが、こどもの利用を促進するカギであると言える。さらに、講座・教室に参加しているこどもが一定数いる反面、「興味や関心のある講座・教室やイベントをやっていない」（小11.9%、中18.1%、高14.3%）と感じるこどもも10%超に上っており、提供されているプログラムと子どものニーズが必ずしも合致していない可能性があることも示唆される。

#### (5) 参加してみたい学習機会（公民館事業の内容）【問32 (p.46)】

「どんな内容の学習機会であれば参加してみたいと思うか」を質問したところ、いずれの学年においても最も高いのが「自分の趣味に関すること」であり、小学校5年生で64.2%、中学校2年生で63.7%、高等学校2年生で55.1%となった。

小学校5年生では、次いで「スポーツに関すること」41.6%、「自然・生活体験学習」30.2%となった。さらに「インターネットに関すること」19.5%、「健康に関すること」19.3%、「地域の歴史を学ぶ機会」15.2%と、いずれも15%を上回っており、幅広い学習ニーズが示されている。

中学2年生では、次いで「スポーツに関すること」36.8%、「わからない」18.7%と続き、高等学校2年生では、次いで「わからない」26.4%、「スポーツに関すること」24.1%となっている。

小学生の頃の幅広い学習ニーズに応えるとともに、中学生・高校生になっても発展的・継続的に学べるような工夫、趣味やスポーツを契機により幅広い学習へとつなぐ工夫などが必要である。また、「わからない」という回答のなかにある潜在的な学習ニーズを掘り起こしていく努力も期待される。

#### (6) 「公民館の利用経験」と「定住意識」【問28×問6 (p.37)】<sup>(12)</sup>

小学校5年生では、この1年間に公民館の利用経験が「ある」と回答した3,033人のうち、地域に「ずっといたい」と回答している割合は52.1%であった。一方、利用経験が「ない」と回答した2,034人では51.2%となり、その差は0.9ポイントであった。中学校2年生では、利用経験が「ある」2,545人のうち18.5%が地域に「ずっといたい」と回答し、利

用経験が「ない」2,697人の18.0%と比べて、0.5ポイントの差がみられた。高等学校2年生では、利用経験が「ある」1,558人の15.9%、利用経験が「ない」2,867人の12.6%が地域に「ずっといたい」と回答しており、その差は3.3ポイントであった。

いずれの学年においても、公民館を利用したことのある子どもの方が「地域にずっといたい」と感じている割合は高いが、その差は僅かである。高等学校2年生を除けば、「公民館の利用経験」と「定住意識」にはほとんど関連は認められなかった。

#### (7)「公民館の利用経験」と「地域への愛着」【問28×問7(p.38)】<sup>(13)</sup>

小学校5年生では、この1年間に公民館の利用経験が「ある」と回答した3,033人のうち、地域が「好き」と回答した割合は66.3%であった。一方、利用経験が「ない」と回答した2,034人では61.5%であり、その差は4.8ポイントであった。中学校2年生では、利用経験が「ある」2,545人のうち43.3%が地域を「好き」と回答し、利用経験が「ない」2,697人の38.9%と比べ、4.4ポイントの差がみられた。高等学校2年生では、利用経験が「ある」1,558人の44.3%、利用経験が「ない」2,867人の32.9%が地域を「好き」と回答しており、その差は11.4ポイントと三つの学年の中で最も大きかった。

このように、いずれの学年においても、公民館の利用経験がある子どもの方が「地域が好き」と感じている割合は高く、利用経験の有無で約4~11ポイントの差がみられる。特に高校2年生では差が大きく、公民館の利用経験と地域への愛着には、因果関係は不明であるものの、一定の関連が認められる。

#### (8)「公民館の利用経験」と「地域で話をする大人の有無」【問28×問11(p.40)】<sup>(14)</sup>

小学校5年生では、この1年間に公民館の利用経験が「ある」と回答した3,033人のうち、住んでいる地域によく話をする大人が「たくさんいる」と回答しているのは31.9%であった。一方、利用経験が「ない」と回答した2,034人では20.8%であり、その差は11.1ポイントであった。中学校2年生では、この1年間に公民館の利用経験が「ある」と回答した2,545人のうち、「たくさんいる」の割合は20.8%であった。一方、利用経験が「ない」と回答した2,697人では12.2%であり、その差は8.6ポイントであった。高等学校2年生では、この1年間に公民館の利用経験が「ある」と回答した1,558人のうち、「たくさんいる」の割合は14.1%であった。一方、利用経験が「ない」と回答した2,867人では7.6%であり、その差は6.5ポイントであった。

このように、いずれの学年でも、公民館の利用経験がある子どもの方が地域でよく話をする大人がいる割合は高く、その差は約6~11ポイントである。このことは、公民館が地域の大人と出会い、関係性を広げる場として機能している可能性も示しているのではないかと。

#### (9)「公民館の利用経験」と「地域・社会への貢献意識」【問28×問13(p.42)】<sup>(15)</sup>

小学校5年生では、この1年間に公民館の利用経験が「ある」と回答した3,033人のうち、地域・社会のために何かしてみたいと「思う」は37.8%であった。一方、利用経験が「ない」と回答した2,034人では28.4%であり、その差は9.4ポイントであった。中学校2年生では、利用経験が「ある」2,545人の22.6%、利用経験が「ない」2,697人の15.9%が「何かしてみたい」と回答しており、その差は6.7ポイントであった。高等学校2年生では、利用経験が「ある」1,558人の23.6%、利用経験が「ない」2,867人の12.6%が「何か

してみたい」と回答しており、その差は11.0ポイントであった。

このように、いずれの学年においても、公民館の利用経験があるこどものほうが、「地域・社会のために何かしてみたい」と感じている割合は高く、利用経験の有無で約6～11ポイントの差がみられる。特に、高校生の段階では、公民館での交流・学習が「地域・社会のために何かしてみたい」という意欲を掘り起こしている可能性も示唆される。

## おわりに—論点の提示

本調査から見えてきたことをふまえ、「ふるさと青森を愛し、誇りに思う人づくり」に向けた施策を検討していく上で必要となる論点（5点）を提示したい。

### ① 「小学生」と「中学生・高校生」のギャップとその橋渡し

本調査では、「地域にずっといたい」【問6】や「地域が好き」【問7】、「地域の出来事への興味・関心」【問9】などの指標が、小学校5年生から中学校2年生・高等学校2年生へと学年が上がるにつれて低下する傾向が確認された。また、「地域の大人との関わり」【問10】や、「地域活動への参加意欲」【問14】といった項目においても同様であった。こうした傾向があることは、発達段階の変化（思春期の特徴）から必然であるとも言えよう。しかし同時に、小学生の段階で見られる地域への愛着・関心や「何かしてみたい」というポジティブな意識を、中学生・高校生へと成長していく過程においても、いかに持続・発展させることができるのかを検討していくことも必要である。

### ② 発達段階に応じた「地域と関わる機会」のデザイン

クロス集計からは、「定住意識」【問6】、「地域への愛着」【問7】、「地域の出来事への興味・関心」【問9】、「地域の大人との関わり」【問10】、「地域・社会への貢献意識」【問13】の間に関連があることが確認された。今後は、これらの因果関係の有無や方向についても分析を進めるとともに、こどもの発達段階をふまえながら「地域と関わる機会」をより豊かなものへとリ・デザインしていくことが必要である。その際、各地域の特性を活かすことや、こどもの意見・主体性を尊重することはもちろん、「地域（の人）とつながる」「地域を知る」「地域をつくる」という三つの観点を総合的に捉えて検討することが重要となるだろう。

### ③ 「地域への興味・関心」「地域・社会への貢献意識」の掘り起こし、地域活動への参加のあと押し

「地域の出来事への興味・関心」については、中学校2年生・高等学校2年生でも「ややある」の回答が一定の割合を示しており【問9】、また「地域・社会への貢献意識」についても、何かしてみたいと「やや思う」の回答を合わせると中高生でも一定の割合が維持されている【問13】。加えて、地域活動への参加意欲でも「できれば参加したい（興味はある）」という回答が中学生・高校生になっても少なくない【問14】。こうした実態を踏まえると、「ない」「思わない」層に向けた強制的ではないアプローチを検討するとともに、「ややある」「やや思う」層に対する具体的な働きかけが重要な意味をもつだろう。こどもの関心・意欲の芽を丁寧に受け止め、次の一歩へとつなげるためのサポートを検討していくことが必要である。

### ④ こどもにとってより身近で必要とされる公民館づくり

本調査では、公民館が、図書館やスポーツ施設と並ぶ「身近な公共施設」として認識され

ていることが確認された【問 27】。一方、利用経験の無い子どもも少なくなく、理由として「何をやっているのか知らない」「目的がないと入りづらい」という回答も目立っている。また、子どもからも「気軽に立ち寄れる雰囲気づくり」が求められている【問 31・問 33】。こうした実態を踏まえるならば、公民館を「より身近で、利用しやすい施設」として再構築していくための手立てについて、各公民館の現状もふまえつつ検討を進めていくことが重要となる。また、「子どもからより必要とされる公民館」へと進化していくためには、こどもの意見を反映できる公民館運営の在り方や、公民館における「ユースワーク」（子ども・若者の主体的な参画による共同的な学びの場づくりとその伴走的支援）の機能を高めていく方策にまで踏み込んだ議論も期待される。

#### ⑤ 公民館の利用経験がもたらすものとこれからの事業展開

本調査では、「公民館の利用経験」がある子どもの方が、「地域が好き」【問 28×問 7】、「地域でよく話をする大人がいる」【問 28×問 11】、「地域・社会のために何かしてみたい」【問 28×問 13】と回答する割合が高いことが確認された。（因果関係まで特定できてはいないが）こうした相関が見られることもふまえるならば、公民館の存在は重要であり、既存の取り組み（子どもに向けた事業）をブラッシュアップさせたり、新たな取り組みを構想したりしながら、より確かな役割を果たしていくことが期待される。その際、③に示した「地域（の人）とつながる」「地域を知る」「地域をつくる」という観点から、地域のヒト・モノ・コトを結び、子どもが主体となった地域学習を組織・支援していくことがカギとなるであろう。そして、県内の公民館から多彩なチャレンジが生まれるようにするための基盤整備、公民館における地域学習の展開を支える方策（青森県教育委員会や青森県総合社会教育センターが担うべきことなど）についても検討していく必要があるだろう。

以上の論点は、本調査から見えてきたことをもとに、「ふるさと青森を愛し、誇りに思う人づくり」に向けて検討すべき課題として整理したものである。私自身も生涯学習審議会の一員として、他の委員や職員のみなさんをはじめ、多くの方との議論を重ねながら、方向性を探っていきたい。「地域と関わる機会」を丁寧に編みつつけることは、結果として地域への愛着の形成に資し、子どもが地域・社会をつくる主体として育つことへと開かれていくと考える。その道筋を、こどもの意見を聴き、子どもとともに探っていく動きが広がっていくことを願っている。

#### 【補注】

- (1) 令和 6 年度、青森県教育委員会では、県内在住の 20 代～70 代の一般県民 2,500 人を対象に「ふるさと青森を愛する心と行動に関する県民の意識調査」（有効回答率 35.1%）を実施している。本調査では、「あなたがいま住んでいる地域（市町村）が好きですか」との質問に対し、「好き」（43.0%）、「どちらかと言えば好き」（44.1%）という結果であった。調査の対象や質問における「地域」の範囲が異なっているものの、青森県においては、子どもから大人まで、多くの県民が地域に対する好意的な意識をもっていると言える。
- (2) 問 7×問 6 は、「地域への愛着」と「定住意識」の関連を示すものである。小学校 5 年生（ $p < 0.001$ ,  $V = 0.479$ （中程度の関連））、中学校 2 年生（ $p < 0.001$ ,  $V = 0.433$ （中程度の

関連))、高等学校2年生 ( $p < 0.001$ ,  $V = 0.389$  (中程度の関連)) である。いずれの学年も統計的に有意である。 $V$  は小学校5年生で相対的に大きく、高等学校2年生で小さい傾向がみられる。

- (3) この質問は「令和7年度 全国学力・学習状況調査 (質問調査)」とほぼ同じ内容である。同調査によれば、「地域の大人に、放課後や休日に勉強・スポーツ・体験活動で関わってもらったり、一緒に遊んでもらったりすることはありますか」という問いに対し、小学校6年生は「よくある」16.7%、「ときどきある」22.6%、中学校3年生は「よくある」11.6%、「ときどきある」17.7%という結果であった。本調査とは対象学年や選択肢の表現が異なるため単純比較はできないものの、地域の大人との関わりに関して、青森県の小学生は全国平均より約8ポイント高く、中学生では全国とほぼ同程度であることが分かる。
- (4) 問10×問6は、「地域の大人との関わり」の有無・頻度と、「定住意識」の関連を示すものである。小学校5年生 ( $p < 0.001$ ,  $V = 0.094$  (ごく弱い関連))、中学校2年生 ( $p < 0.001$ ,  $V = 0.105$  (弱い関連))、高等学校2年生 ( $p < 0.001$ ,  $V = 0.122$  (弱い関連)) である。いずれの学年も統計的に有意である。 $V$  は高等学校2年生で相対的に大きく、小学校5年生で小さい傾向がみられる。
- (5) 問10×問7は、「地域の大人との関わり」の有無・頻度と、「地域への愛着」の関連を示すものである。小学校5年生 ( $p < 0.001$ ,  $V = 0.102$  (弱い関連))、中学校2年生 ( $p < 0.001$ ,  $V = 0.111$  (弱い関連))、高等学校2年生 ( $p < 0.001$ ,  $V = 0.113$  (弱い関連)) である。いずれの学年も統計的に有意であり、学年差は小さい。
- (6) この質問は「令和7年度全国学力・学習状況調査 (質問調査)」とほぼ同じ内容である。同調査によれば、「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」という問いに対し、小学校6年生は「当てはまる」33.9%、「どちらかといえば、当てはまる」47.4%、中学校3年生は「当てはまる」22.4%、「どちらかといえば、当てはまる」52.8%という結果であった。本調査とは対象学年や選択肢の表現が異なるため単純比較はできないものの、地域・社会への貢献意識に関して、青森県の小学生は全国平均より約3ポイント低く、中学生では全国平均より約11ポイント低い。
- (7) 問6×問13は、「定住意識」と「地域・社会への貢献意識」の関連を示すものである。小学校5年生 ( $p < 0.001$ ,  $V = 0.219$  (弱い関連))、中学校2年生 ( $p < 0.001$ ,  $V = 0.207$  (弱い関連))、高等学校2年生 ( $p < 0.001$ ,  $V = 0.218$  (弱い関連)) である。いずれの学年も統計的に有意であり、学年差は小さい。
- (8) 問7×問13は、「地域への愛着」と「地域・社会への貢献意識」の関連を示すものである。小学校5年生 ( $p < 0.001$ ,  $V = 0.239$  (弱い関連))、中学校2年生 ( $p < 0.001$ ,  $V = 0.226$  (弱い関連))、高等学校2年生 ( $p < 0.001$ ,  $V = 0.245$  (弱い関連)) である。いずれの学年も統計的に有意であり、学年差は小さい。
- (9) 問10×問13は、「地域の大人との関わり」の有無・頻度と「地域・社会への貢献意識」の関連を示すものである。小学校5年生 ( $p < 0.001$ ,  $V = 0.162$  (弱い関連))、中学校2年生 ( $p < 0.001$ ,  $V = 0.158$  (弱い関連))、高等学校2年生 ( $p < 0.001$ ,  $V = 0.165$  (弱い関連)) である。いずれの学年も統計的に有意であり、学年差は小さい。
- (10) 問26 (p.74) では、「地域の活動に参加しやすくするために、どんな工夫やサポート

が必要だと思いますか」という質問に対し、いずれの学年においても「友だちと一緒に参加できるようにする」の回答割合が最も高く、小学校5年生で60.4%、中学校2年生で60.7%、高等学校2年生で47.4%となっている。

- (11) 寺中作雄監修・小和田武紀編集『公民館図説』（岩崎書店・1954年）において、公民館は、①民主的社会教育機関です、②村の茶の間です 親睦交友を深める施設です、③産業振興の原動力です、④文化交流の場です、⑤民主主義の訓練場です、⑥郷土振興の機関です、と説明されている。
- (12) 問28×問6は、「公民館の利用経験」と「定住意識」の関連を示すものである。小学校5年生 ( $p=0.110$ ,  $V=0.035$  (ごく弱い関連))、中学校2年生 ( $p=0.186$ ,  $V=0.031$  (ごく弱い関連))、高等学校2年生 ( $p=0.019$ ,  $V=0.048$  (ごく弱い関連)) である。高等学校2年生のみが統計的に有意であり ( $p=0.019$ )、小学校5年生 ( $p=0.110$ ) および中学校2年生 ( $p=0.186$ ) は有意ではない。
- (13) 問28×問7は、「公民館の利用経験」と「地域への愛着」の関連を示すものである。小学校5年生 ( $p=0.002$ ,  $V=0.054$  (ごく弱い関連))、中学校2年生 ( $p=0.008$ ,  $V=0.048$  (ごく弱い関連))、高等学校2年生 ( $p<0.001$ ,  $V=0.114$  (弱い関連)) である。いずれの学年も統計的に有意である。 $V$  は高等学校2年生で相対的に大きく、中学校2年生で小さい傾向がみられる。
- (14) 問28×問11は、「公民館の利用経験」と「地域で話しをする大人の有無」の関連を示すものである。小学校5年生 ( $p<0.001$ ,  $V=0.176$  (弱い関連))、中学校2年生 ( $p<0.001$ ,  $V=0.173$  (弱い関連))、高等学校2年生 ( $p<0.001$ ,  $V=0.168$  (弱い関連)) である。いずれの学年も統計的に有意であり、学年差は小さい。
- (15) 問28×問13は、「公民館の利用経験」と「地域・社会への貢献意識」の関連を示すものである。小学校5年生 ( $p<0.001$ ,  $V=0.105$  (弱い関連))、中学校2年生 ( $p<0.001$ ,  $V=0.099$  (ごく弱い関連))、高等学校2年生 ( $p<0.001$ ,  $V=0.165$  (弱い関連)) である。いずれの学年も統計的に有意である。 $V$  は高等学校2年生で相対的に大きく、中学校2年生で小さい傾向が見られる。

#### 【補足：カイ二乗検定／p値／V値の説明】

考察をまとめるにあたり、クロス集計に関しては質問項目の間に関連があるかを確かめるため、カイ二乗検定を行った。カイ二乗検定とは、度数分布が無関連（独立）であるとの仮説から、期待される度数分布と比べてどの程度ずれているかを評価する方法である。ずれが大きいほど、両設問の間に関連があると判断できる。

p値は、得られたずれ ( $\chi^2$ ) の大きさが、偶然によって生じたと見なせるか否かを示す指標である。p値が小さいほど偶然とは言いにくく、一般に  $p<0.05$  を統計的に有意と判断する。ただし、本調査のように回答数が多い場合には、小さな差でもpが小さくなりやすいため留意が必要である。

CramerのV (V値) は、関連の強さ (差の大きさ) を0~1の範囲で表す効果量である。目安として、 $V\approx 0.10$  は弱い関連、 $V\approx 0.30$  は中程度、 $V\approx 0.50$  以上は強い関連と解釈できる。教育・地域・社会など関するデータでは、複数の要因が積み重なって意識や行動に影響するため、Vが小さく、弱い関連であっても一定の意味を持つとされる。

## Ⅱ 調査結果から見る「学校以外における地域活動」に関する考察

八戸学院大学 地域経営学部 特任准教授 井上 丹

### はじめに

約20年前から始まった学校での「総合的な学習の時間」の導入以降、学校教育の中で社会や地域と関わる機会が増えてきている。特に青森県では、2022年度から県立高等学校において総合的な探究の時間に「あおり創造学<sup>1</sup>」を導入し、高等学校の生徒たちは地域に関わる機会が増えている。

認定NPO法人カタリバによると<sup>2</sup>、子どもたちの良き相談相手になるのは時に、親でもない先生でもない第三の先輩であると言われている。地域活動に参加すれば、この第三者の大人に出会い交流し、将来のキャリアにおいて大きな転換となる可能性がある。例えばスポーツクラブの活動に参加し優れた成績を出せば、指導者のネットワーク等も加わりプロアスリートへの道が拓けるように、学校以外でも子どもたちの人生に大きな影響を与えることがある。さらにプロアスリートの例でいえば、地域からプロアスリートが輩出されると、地域ぐるみでの応援活動や地域の子どもたちのスポーツ増進といったような好影響も期待できる。学校だけでなく地域も子どもたちに積極的に関わっていき、地域全体で育てるような社会になっていくべきである。

本稿では、子どもの学校以外における地域活動に関する実態調査結果から、地域活動の参加状況を分析し、保護者や先生ではない地域の大人との関わりに注目して、子どもたちが地域活動により参加するための施策の方向性について考察する。なお以下、回答者の小学校5年生は小学生、中学校2年生は中学生、高等学校2年生は高校生と表記している。

### 1. 調査結果から読み取れること

#### (1) 属性の違いについて

まず問2で出身市町村を調査したが、地域や市町村区分での大きな違いは見られなかった。また、問3で兄弟や姉妹の有無について調査したところ、すべての学年で「いる」が多数(85%以上)だったため、これらの違いについては分析していない。小中高による違いが見られたのは、問4のスポーツクラブの加入率が小学生で46.6%に対し高校生は7.1%に減少している。小学校の部活動の地域移行の影響が考えられるため、小学校のスポーツは学校以外の活動となってきている。一方で高等学校は学校内での部活動が中心となる。問5の塾・習い事でも同様の結果が読み取れる。このことから、小学生は学校以外での活動が多いため、地域活動に関わる環境がある一方で、中学生と高校生は学校内の活動が大部分になっているため、地域活動への参加は限られることが言える。

---

<sup>1</sup> あおり創造学とは、生徒一人一人の「ふるさとあおり」への愛着や誇り、夢を抱き未来に向かって挑戦する意欲を醸成するために、地域資源や人材を活用して、高校の所在地及び自身の居住地域等について理解を深める学習(青森県庁ホームページより)。地域の自治体や企業・団体と連携して実施する高校も増えてきている。

<sup>2</sup> 親や教員(タテ)、同級生の友だち(ヨコ)とは違った“一步先を行く先輩”という、10代の内発性に火を灯すナナメの関係。この新たな関係を、すべての活動の軸としている。(認定NPO法人カタリバホームページより <https://www.katariba.or.jp/about/>)

## (2) 地域に対する気持ちについて

問6から問9までと問13,14では地域に対しての気持ちを質問している。問6で地域にずっといたいと「思う」「やや思う」の合計は、小学生で85.5%、中学生で62.2%、高校生で50.3%、問7の地域が「好き」「やや好き」の合計は小学生で92.8%、中学生で83.7%、高校生で80.4%となっている。中学生と高校生が地域のことは好きでも、ずっといたいかに差が出るところは将来の進路などが関わっていると考えられるため、地域が嫌いというわけではないことがわかったことは嬉しい結果である。

問8の良いと思うところでは、「友だちがいる」「家族がいる」がどの学年も1位、2位となっていることから、身近な人の存在が地域の気持ちに与える影響が強いことがわかる。一方で「地域の人とのつきあいがたくさんある」はどの学年も30%以下の回答だったため、子どもたちの感情にはあまり影響していないようだ。

「楽しく遊べる場所がある」は小学生が57.9%で3位だったのに対し、中学生と高校生は回答が非常に少ない。学年が上がるにつれて遊び方の変化があるため、この調査だけでは詳細は読み取れないが、高校生が求めるような遊ぶ場所がないことは言える。つまり多くの中学生と高校生は大切な人の存在が、地域の気持ちにも強く依存している。

問9の地域の出来事に興味関心は「ある」「ややある」は小学生が72.3%、中学校が50.4%、高校生が47.0%だった。この結果より、地域のことを知りたいかどうかを読み取る。

問13の地域を良くするために何かしたいと「思う」「やや思う」の合計は、小学生が78.3%、中学生が63.9%、高校生が59.3%だった。問14の地域活動参加への気持ちについて「積極的に参加したい」「できれば参加したい」の合計は、小学生が75.2%、中学生が59.2%、高校生が58.7%だった。

以上のことから、地域のことが「好き」という気持ちと、「知りたい」や「活動したい」には一定の差があることが言える。当然、好きな人は興味関心が高く参加したい気持ちも高いが、中には好きだが活動までには至らない層が一定数いる。問13では高校生で「好き」だが「あまり思わない」「まったく思わない」合計が23.1%、「やや好き」だが「あまり思わない」「まったく思わない」合計が36.3%となった。同様に問14では中学生は「好き」だが「あまり参加したくない」「参加したくない」合計が20.8%、「やや好き」だが「あまり参加したくない」「参加したくない」合計が35.8%となっている。好きという気持ちがあるにもかかわらず参加したいと思っていない層には対策の施し方があるのではないだろうか。この点について、他の質問項目から、活動のきっかけ、活動内容、地域の大人との関りについて次項で分析する。

なお、少数派であるが「きらい」で「参加したくない」人は、問15で参加していない理由が「興味がない」「家で過ごしたい」が多いことから対策は難しいため、解決すべき優先順位は低いと考える。

## 2. 学校以外の地域活動への参加について

### (1) 地域活動参加のきっかけ

地域活動の参加実態については、問15の「まったく参加したことがない」の回答を除けば、すべての学年が80%以上となっており、子どもたちは何かしらの地域活動に参加しているが、問16から参加回数は「年に1回くらい」や「半年に1回くらい」と多くはない。問17のきっかけで最も多いのは、小学生が「おもしろそうだったから」で53.3%、中学生と高校生は「友人が参加しているから」でそれぞれ42.3%、40.5%となって

いる。次いで多いのは、小学生が「家族にすすめられたから」が 35.6%、中学生と高校生は「おもしろそうだったから」が 42.0%、36.2%となっている。

前項で、地域が「好き」な理由で多かったのは身近な人がいるからという回答だったため、家族や友人が地域活動に参加していれば、一緒に参加するきっかけになる一方で、家族や友人の参加がなければ、参加しない可能性も考えられる。問 24 の地域活動の情報源で多いのは、小学生が「親や親戚」46.0%と「学校からの案内」45.0%で、中学生と高校生は「友だち」がそれぞれ 53.3%、42.6%、次いで「親や親戚」が 48.3%、37.7%であることから、参加のきっかけは身近な人の影響が強いことが言える。

今後、地域活動への参加者を増やすための方策の一つとして、参加経験があるこどもから、参加したことがないこどもへ勧めることが重要になりそうだ。その際に、問 18 で地域活動に参加して良かったことで最も多い「楽しかった（思い出ができた）」という感想や、問 25 で最も多い「友だちや人とのつながりができる」ことを共に伝えれば、参加のきっかけをつくれるのではないだろうか。

また、参加のきっかけづくりとしてもう一つ可能性があるのは、スポーツクラブや塾・習い事への加入である。問 15 と問 4 のクロス集計結果から、小学生と中学生はすべての地域活動の参加経験が増えていることがわかる。特に地域のスポーツ大会への参加率は「入っていない」こどもとの差が大きい。スポーツクラブには同世代のこどもたちが集まり定期的にクラブ活動を行っている想定されるため、こどもたち同士の交流から地域活動の情報入手や参加のきっかけにつながっていると考えられる。同様に問 15 と問 5 のクロス集計結果から、すべての学年において塾・習い事の加入者は地域活動の参加経験が増えていることがわかる。唯一、高校生のスポーツクラブ加入者のみ、「地域のお祭り」と「地域のイベント」への参加率が下がっていた。クラブ加入により多忙になり、地域活動への参加が難しくなっていると考えられる。

## （２）活動内容

次にどのような地域活動に参加していて、今後はどのような活動に参加が期待できるのかを考察する。問 15 の結果から、すべての学年において「地域のお祭り」が最も多く、次いで「地域のイベント」となっている。地域の祭については、問 22 で改めて質問しており、全体で 70%以上が身近な地域の祭に参加しており、これは青森県の一つの特長だと言える。逆にそれ以外の活動は少なく、特に「地域の歴史・文化などを学ぶ活動」「地域の人との交流会」はいずれの学年も 10%未満となっている。問 20 のこれから参加してみたい地域活動でも回答者は少なく、この目的での参加は見込めそうにない。この点については、参加者が多い地域の祭との組み合わせを提案したい。例えば、祭りに参加する前に、なぜその地域で祭が開催されているのか歴史背景や生活文化を学んだり、祭りに参加するにあたって家族でも友人でもない地域の大人から参加方法を学んだりして交流するような活動が考えられる。

問 20 において、祭りイベントの他に回答が多かったのは「ボランティア活動」である。中学校や高等学校では近年、ボランティア活動への参加が進路においてプラスになる傾向にあるため、今後も参加者増加が期待できる。参加経験が多い地域の祭やイベントでのボランティア活動は多いと考えられるが、それ以外となれば子ども会や町内会でのボランティア活動を増やす余地があるのではないだろうか。問 21 の結果から期待される活動は多岐にわたるが、実施する際には問 26 にあるように「友だちと一緒に参加できるようにする」工夫やサポートが求められる。そして参加してもらうための情報提供となると、

家族や友人よりは、学校からの案内か町内のポスターに頼ることになるため、町内会は積極的な情報発信が求められる。活動の場所としては、問 27 にある「地域の公共施設」となる可能性があるため、子どもたちの利用が多い「図書館」「公民館」「スポーツ施設」でも情報がわかる仕組みがあると良いだろう。

### (3) 地域の大人との関わり

上記で地域の大人との交流が今後の課題であると述べたが、現状ではどうなのか。今回の調査では問 10 の結果から、小学生は「ある」「ややある」の合計 47.6%が地域の大人との関わりがあるようだ。一方で中学生と高校生の「ある」「ややある」の合計はそれぞれ 28.6%と 18.3%と少ない。問 11 の「よく話をする大人」だと小学生は「たくさんいる」「少しいる」が 63.2%、中学生は 48.9%、高校生は 36.4%である。問 12 から、その大人とは「近所の（自分の家の近くに住んでいる）人」が中心であり、他はスポーツクラブや塾・習い事の指導者となっている。

この地域の大人との関わりがあれば、問 13 の地域や社会を良くするために何かしてみたいという気持ちに影響を与えている。クロス集計結果から、小学生で大人との関わりが「ある」と何かしてみたいと「思う」割合が 49.1%、中学生で 34.5%、高校生で 40.2%と高くなっていることがわかる。これは、子どもたちにとって地域参加の可能性が友だちや家族だけでなく、地域の大人となる可能性を示唆している。今回の調査結果からは、主に地域の祭で大人との交流があると想定されるが、それは子どもたちが望んでつくりだした機会とは言えず偶発的だと考えられる。

近年は学校教育で地域の大人の話聞く機会は増えているようだが、学校以外で地域の大人と関わるために、町内会や公共施設に子どもたちが行くとは考えにくい。問 30 の結果からも、公民館が出会いの場になっているとは言いがたい。どうすれば地域の大人と関われるのか、地域の大人が子どもたちと交流するための場所や時間をどう確保するかなど、引き続き検討が必要である。

### 3. 社会教育施設等の利活用について

学校以外で活動するとなれば、学校以外の拠点が必要となる。屋外で開催されることが多い祭りやイベントなら問題はないが、地域の大人と子どもたちが交流するときには問 27 の質問にあるような社会教育施設の利用が考えられる。図書館やスポーツ施設は利用目的が限定されるが、公民館であれば地域活動の拠点となりうる。

問 28 から公民館の利用は全学年で 50%以下となり、すべての子どもたちが利用している状況とは言えない。その中でも、問 11 の住んでいる地域に「よく話をする大人」がたくさんいる小学生の利用は 57.7%、中学生は 54.3%と高くなっていたり、問 13 の地域や社会をよくするために何かしてみたいと「思う」小学生の利用が 54.9%、中学生は 50.8%となっていたりすることから、地域活動に積極的な子どもたちは利用している傾向にある。

それでも 50%台という結果から、今後の利用促進に向けた検討が必要であるが、問 31 の利用していない理由で注目すべき点は「目的がないと入りづらいから」と「何をやっているのか知らないから」がどの学年も理由の 1,2 番となっていることだ。利用したことがない子どもたちにとっては、公民館は誰の何のための施設なのか、どうすれば利用できるのかを知らない可能性が高い。これを改善するためには、問 33 の結果にある通り「気軽に立ち寄れる雰囲気づくり」が求められるが、その対策の一つとして問 29 の現在の利用目的で多い「友だちとおしゃべりしたり、遊んだりする」ことができる場所であること

を、まずは知ってもらわなければならない。学校からの案内では、このことは届かないと考えられるので、家族と一緒に訪れたり、友だち同士で行ってみたりして、気軽に利用できることや、公民館での「まつり・文化祭などの行事」、問 32 の「趣味に関すること」の情報があれば、その後も継続的に利用されるのではないだろうか。

## おわりに

こどもたちへの教育や活動と言えば以前は、学校だけ、親から子へと限定的な考えだったかもしれないが、いまは学校が地域と連携してこどもたちを育てていく方向性になっており、地域の大人たちもこどもと積極的に関わることが求められる。こどもたちと地域活動を通して交流すれば、地域の大人にとっても学ぶ機会につながるだろう。

青森県には青森ねぶた祭のような世界に誇れる祭りが多くあり、こどもたちも多く参加している。こどもたちが友だちと楽しく参加するのも良いが、地域の大人が祭りの背景や歴史をこどもたちに伝えていけば、将来の担い手となったり、次の世代に語り継がれたりして、地域の伝統文化を守っていける。そのためにはまず、地域の大人たちが学び理解し、こどもたちへの伝える方法を考えていかなければならない。

同様にスポーツ分野でも、指導者は競技内容だけでなく、礼儀やマナー、集団行動への対応方法など、こどもたちに教えることは多岐にわたっている。当然指導者も学ばなければならず、そのような生涯学習の機会が求められる。

このように地域の大人たちは、自らも学ぶ姿を積極的にこどもたちに見せるべきではないだろうか。大人の姿勢を見たこどもは、自分も学びたいとか、一緒に学びたいと思うはずであり、そこから新たな地域活動への参加が始まっていくかもしれない。

社会では未だに大人が教える側でこどもが教わる側という雰囲気は強いが、少なくとも地域活動においては、大人もこどももフラットな立場で参加して楽しめるような雰囲気をつくっていければ、地域の大人がこどもたちにとって友だちに近い存在になっていき、地域に対する気持ちや地域活動への参加が好転していくと考えられる。